

ロッキングローラー

「浩美、ついにビッグスターが来るぞ。」

商店街の会合から帰ってきた父が叫ぶように言った。

「えっ。ビッグスターって誰。とりあえずサインもらいに行こう。」

「そうじゃなくて、大型スーパーの全国チェーンの『ビッグスター』だよ。あれがついに隣町にできるらしい。今日はその話で持ちきりだったよ。お客がそっちにばかり買い物に行ってしまったら、この銀転商店街の運命はどうなるんだ。」

「まあ……私も行くねえ。でも、うちの商売には関係ないでしょ。そば屋なんだからさ。」

「全くお前は何も分かってないな。最近の大型スーパーってやつは、『複合施設』って言って、専門店がいっぱい入ってるんだよ。俺はチェーン店のそば屋も絶対入ると見た。そこでついでに食べて行こうということになるからな。うちは味もいいし、こまめに出前もするんだけど、一回来てもらわないことにはなあ。」

「ははは。三代続いたうちの店も、父さんの代でついにおしまいかあ。」

「そうになったら、お前の学費は誰が出すんだよ。ギターなんかいじってないで、店手伝え。そば屋の跡継ぎに音楽はいららないよ。出前だ出前。まずクリーニング屋と本屋。」

とんだとぼっちりだ。私は跡継ぎになるなんて、一度も言ったことはないし、趣味でバンドやるくらいいいじゃない。自分の家の手伝いでは一銭にもならないのだが、大学の高い学費を出してもらっていることを思えば、出前要員として使われるのは仕方なかった。

まずクリーニング屋の裏口から「そば屋です。」と声を掛けた。奥からおばあさんが現れた。クリーニン

グ屋の仕事はおじさん夫婦がやっているのだが、おばあさんは八十歳過ぎても、奥でそろばんをはじいて会計を一手に引き受けている。

「浩美ちゃん、いつもすまないねえ。本当なら店に食べに行きたいんだけど足が弱くてさ。」

「いやいや。そば屋は出前やってなんぼですから。」

「なんとかスターが来るらしいね。便利にはなるかもしれないけど、近くに商店街もないと車が運転できない年寄りには困るよ。なんとか商店街を元気にする案はないもんかねえ。」

「あ、私、まだ本屋に出前しないといけないので、失礼します。」

「本屋といえば、あそこの潤ちゃんは昔インテリだったから、いい案があるかも……。」

おばあさんの話は延々と続きそうだったので、私はバイクに飛び乗った。よく考えてみると、本当にこの町は大学生とお年寄りばかりだ。商店街の元気なおじさんたちも、あと何年かしたら「お年寄り」の仲間かもしれない。「本屋の潤ちゃん」も六十いくつか。

「こんにちは。そば屋です。」

「おう。ヒロか。父さんからビッグスターのこと、聞いたか。」

「女子大生つかまえて『ヒロ』はやめてくださいよ。しかも今日はどこ行ってもその話ばかりだし。でももう、しょうがないでしょ。決まっちゃったものは。時代の……。」

「これだから平成の若いもんはダメ。すぐ『時代の流れには逆らえない』とか言うんだよ。昭和の若いもんは……まあ俺たちのことだけどな、時代にもっと関心をもってたよ。」

「そういえば、クリーニング屋のおばあさんが『潤ちゃんは昔インテリだったから』どうとか言ってたなあ。ところで、インテリってどういう意味なの。」

「はあああ、情けない。ちゃんと大学に行ってるのか。勉強しないやつは『大学生』って言えないよ。……」

そうだ。大学生がいるじゃないか。ヒロ、友達集める。町興おこしだ。ナイスアイディアが浮かんだぞ。よし、俺も久々に仲間集めて……やるかあ。」

「えーっ。『仲間集めて』ってどういうこと。しかもなんで私が。」

雲をつかむような話だと思ったが、私はまず、バンドの友達に相談した。

「たしか、うちの大学に地域興しのサークルがあったぞ。でもどこに聞いたらいいのかな。」

「学生課に聞いてみたら分かるんじゃないか。」

学生課に聞いてみると、大学も地域に貢献する活動を推進していることや、そのためのサークルがあることも分かり、サークルの代表者に会って話をする事ができた。

潤ちゃんと相談の結果、第一回の会合は、土曜日の夜に本屋で行うことになった。大学生は私とバンド仲間、サークルの人たちの合計六人だ。サークルの一人が言った。

「この本屋さんよく来るんだ。大きなチェーン店と違って、ここのおじさん、本の情報なら何を聞いても答えてくれるから。ものすごく物知りだよ。」

私は父さんが「チェーン店と違ってうちはこまめに出勤をする。」と言っていたことを思い出した。

二階のドアを開けると、全員六十歳過ぎと思われる「潤ちゃんの仲間」が十人近く集まっている。何だか知らないけど、迫力のある人たちだ。「平成の若いもん」と「昭和の若いもん」は自己紹介をし、早速商店街を活気づけるための話合いを始めた。壁には潤ちゃんが毛筆で「テーマ・共存」と書いた半紙が貼ってあるのはいいとして、もう一枚の「生涯ロックンローラー」と書いた半紙は、今回のことと関係あるのだろうか。話合いの結果、まずは大学生にもっと商店街を知ってもらおうということで、いろいろなアイディアが出た。話を聞いていた私も、段々楽しくなって、他の友達にも声を掛けてみようと思った。格安でチラシを

刷ってくれることになった文房具屋のおばさんに、潤ちゃんが「チラシの真ん中は、メインイベントの紹介をどーんと頼むわ。」と言った。

「メインイベントって。」

げげんな顔をする私に、潤ちゃんがにやつと笑った。

「名付けて『銀転商店街ロックフェスティバル』。ヒロたちのバンドと俺たちのバンドの勝負だな。大学には他のバンドもあるだろう。みんなで集まって勝負しようや。お子様バンドには負けんぞ。なあ、みんな。」
潤ちゃんの仲間がそれに応えて「オー」と一斉に拳こぶしを突き上げた。

「おじさんたち、元気ですね。」

「あたりまえよ。ロックンローラーはいつだって元気だよ。一回目はきつかけづくりだけど、ビッグスターとの共存を目指すには、もっと壮大なアイデアが必要なんだ。ヒロ、ロックフェスティバルに来て、みんながみんな自分の目当てのバンドの演奏だけを見て帰るわけではないだろう。そしてたまたまその会場で聞いたバンドのファンになってしまいうこともあるんだよ。ビッグスターのファンを、銀転商店街のファンにもできるってことだ。」

「なるほど。そういうことですね。」

「いやいや。まあ、そば屋の四代目もなかなかの行動力だ。ここからの頑張りによっては、銀転商店街のロックンローラー仲間と認めてやってもいいな。」

「銀転商店街四代目か。悪くないね。みんなで集まると、いいアイデアが出るね。よし。」

そう言って立ち上がった私に、潤ちゃんはこっと笑ってうなずいた。

